飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1993年度に飛鳥地域では、飛鳥寺・川原寺・奥山久米寺・橘寺・石神遺跡・山田道・甘橿丘東麓など11件の調査を実施した（調査一覧参照）。このうち石神遺跡・飛鳥寺の調査概要を報告する。

1　石神遺跡の調査（第12次）

1991年度の第10次調査からは、飛鳥幼稚園（旧飛鳥小学校）の敷地を対象として発掘調査を実施してきた。今回はその３回目にあたる。石神遺跡のこれまでの調査で検出した遺構は、おおむねA期（７世紀中頃、斉明朝）、B期（７世紀後半、天武朝）、C期（７世紀末から８世紀初頭、藤原宮期）、D期（８世紀前半、奈良時代）の４時期に区分される。今回の調査では、A・B・Cの各時期とA期以前の遺構を検出した。

A期以前の遺構は石組溝３条（SD1840、1920、1930）、礫敷３面（SX1855、1885、1895）である。これらの遺構は、いずれも北で大きく東に振れる。A期遺構の下層で検出したものであるが、遺物に乏しくその正確な時期は決定しがたい。礫敷SX1855、1885、1895はそれぞれ南辺、東辺、南辺と東辺に長さ20cm前後の石をならべ見切りとしている。これらの礫敷は西に位置する飛鳥川に向かって、次第に低くなっていくように平坦面を構築したものと考えられる。

A期の遺構には、掘立柱建物４棟（SB1900A、1900B、1910、1940）、掘立柱塀１条（SA1705）、溝９条（SD277、297、1625、1713、1714、1850、1851、1860、1945）、石敷３面（SX1706、1709、1915）、礫敷３面（SX1875、1880、1890）がある。これらの遺構は重複関係や層位関係からさらにAa～Adの４小期に細分される。Ad期には、掘立柱塀SA1705を東の限りとしてその内部に桁行７間梁間３間の身舎の四周に庇が巡ると推定される東西棟SB1900を置き、その外周に石敷SX1706、1709を巡らす。その後この石敷を厚く礫で覆い礫敷SX1875、1880とする。SB1900は当初桁行７間梁間３間の規模で建てられ（SB1900A）、のちに身舎規模は変えずに、四面に庇の巡る桁行９間梁間５間の建物（SB1900B）に建て替えられている。

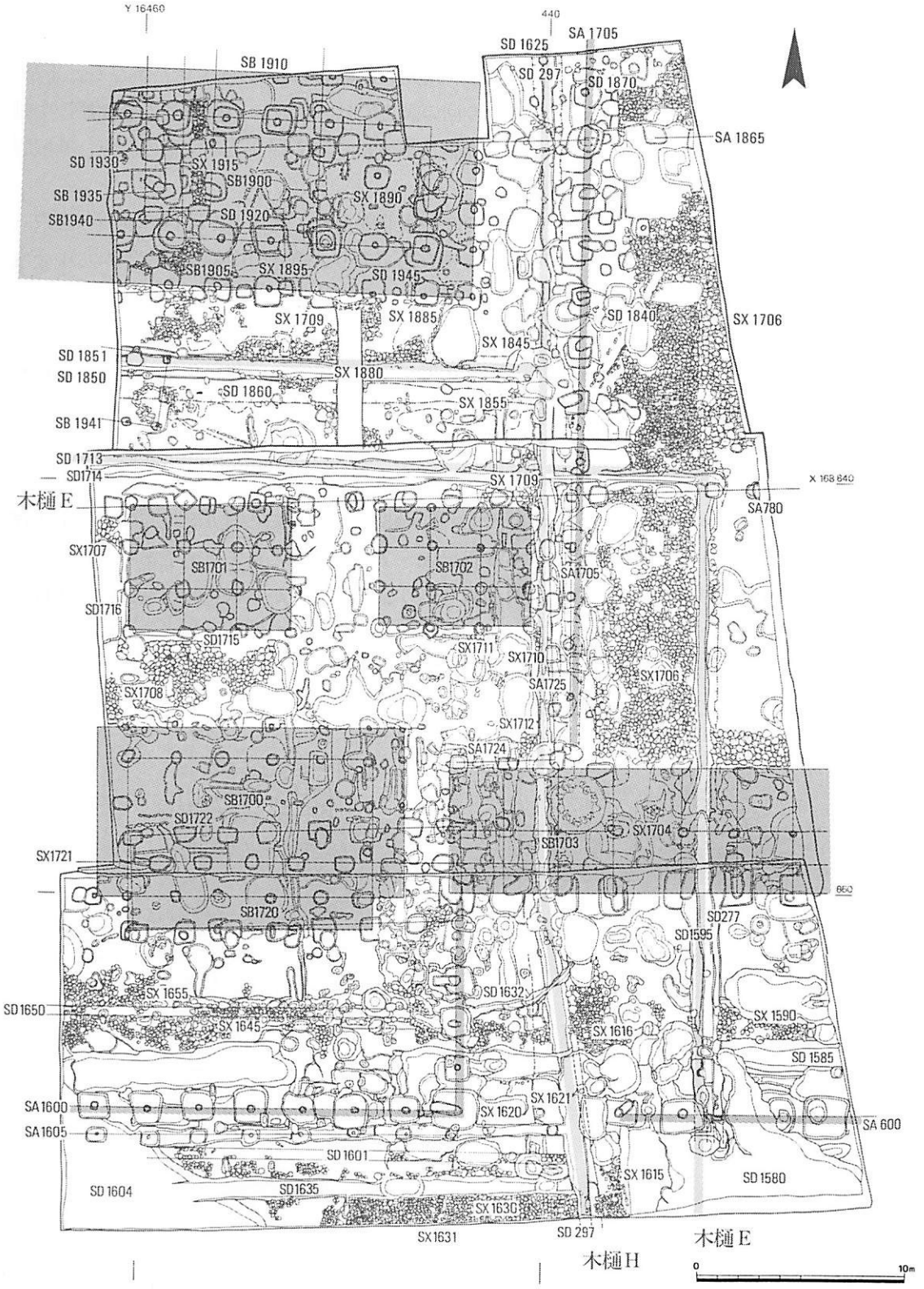
SD297、1625は水落遺跡から延びてきた木樋Hの抜取り溝とその据え付け掘方の溝で、さらに北へと調査区外に延びる。木樋Hは水落遺跡の漏刻台（水時計）北辺から90m以上延びていることになる。東西溝SD1850、1851は、今回新たに確認した木樋の据え付け溝とその抜取り溝である。SD297、1625との接合地点には、不整形土坑SX1845があり、これは木樋の会所にあった桝のような施設の抜取り穴と考えられ、凝灰岩を用いた痕跡がある。

B期の遺構は、掘立柱建物１棟（SB1935）のみである。C期では、掘立柱建物１棟（SB1905）、掘立柱塀１条（SA1865）があり、ともに北で西に２°振れる。なお出土遺物や埋土の特徴からこの時期に属すると考えられる土坑が多数ある。

出土遺物には土器、瓦、金属製品、石製品、土製品がある。土器では多量の須恵器と土師器のほかに施釉陶器や東国系の黒色土器、新羅土器が出土した。また、SB1900やSD1851を中心に赤褐色に焼けた壁土が多量に出土した。これらの壁土には白土が上塗りしてある。

これまでの３次にわたる調査で、石神遺跡西区画南半の様相がおおむね明らかになった。A期でも最後のAd期には、この区画の中心的な建物であるSB1900が営まれ、西区画の南部一体に石敷・礫敷をともなう建物群が配置されていたことが確認された。SB1900の中心は、SB1700の中軸線の延長線上にあたり、西区画の東辺（南北棟SB820の東側柱筋）および南辺（SB1700の南側柱筋）からそれぞれ35.4mに位置する。このことから、区画外周の東西規模を70.8mとすると、南北長（108m、北辺はSB1330の北側柱列）のほぼ３分の２に相当し、さらにSB1900Bはその中心が区画の南限から南北長

のほぼ３分の１の位置にくるように建てられている。このように、Ad 期の西区画は規格性の高い計画的な配置のもとに造営されたことが理解できる。また、Ｃ期の石神遺跡の構造を考えるうえで重要な知見を得た。SA1865は今次調査区の東端から２間目の柱間が広く、第11次調査の知見と合わせ、この部分が中央間にあたるとすると、掘立柱塀で囲まれた区画は東西70.6m、南北70.6mの正方形を呈す



石神遺跡調査遺構図（第10･11･12次）およびＡ期主要遺構　1：300

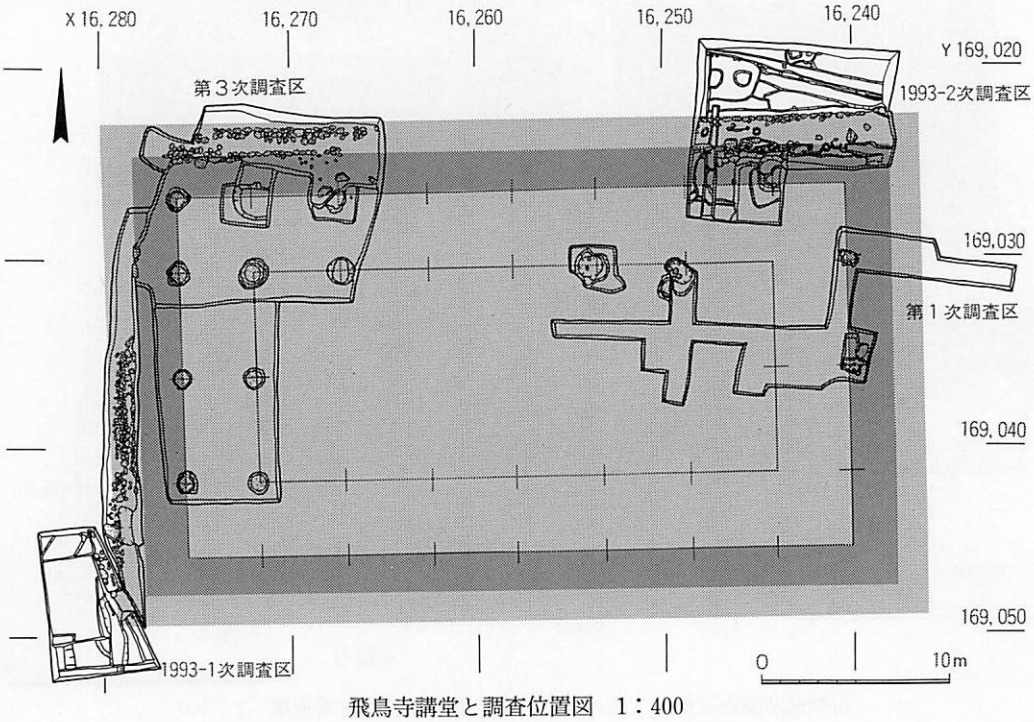
ると推定できる。70.6m四方の規模をもつことは、藤原宮東方官衙地区で確認した区画の規模（東西約66m，南北約72m）に類似し、何らかの官衙施設の存在を示唆しよう。

2　飛鳥寺の調査（1993-１・２次）

住宅改築と来迎寺の庫裡改築に伴い飛鳥寺講堂の基壇外周において実施した事前調査である。1956年の第１次調査、1957年の第３次調査により、講堂は桁行８間（総長35.15m・高麗尺100尺）、梁間４間（総長19m・高麗尺53尺）の四面庇付東西棟建物であることが知られている。基壇外装は花崗岩玉石積みで、その規模は東西43m、南北26m、高さ90cm、周囲には幅1.5mの石敷犬走りが巡る。また、基壇上では７個の花崗岩製礎石が確認されている。今回の調査では、講堂の中軸線が中心伽藍の中軸線に対して、西に１°33′44″振れるという見解の検証、講堂基壇について掘り込み地業の有無、基壇版築の状態を明らかにすることを目的とした。

基壇北辺東寄りの調査（1993-２次）では、基壇上で庇の東北隅から１間目と２間目の礎石の抜取り穴を検出した。犬走りSX878はきわめて良好な状態で遺存しており、講堂の中軸線が南門から中金堂の中軸線に対して西に振れていることを再確認した。犬走りの外側に雨落溝はなく、雨水は自然に北方へ流れていたものと考えられる。残念ながら今回の調査では基壇の東北隅は確認していない。断ち割り調査によれば、基壇は掘り込み地業がなく、古墳時代の包含層の上に暗茶褐色土と黄灰色微砂を交互に積み上げ築成している。基壇外装は花崗岩の玉石積みで、基壇築成後に基壇縁を削り、大型の石を平坦面を外に向けて１石立て、石と基壇との間に裏込めを入れる。なお、講堂西南隅犬走り部分（1993-１次）は、中世以降の破壊により、すでに旧状をとどめていないことが判明した。

遺物としては、基壇北側の厚い整地層を主体に、コンテナ430箱分の大量の瓦が出土した。飛鳥寺創建期の単弁蓮華文軒丸瓦の出土から講堂の創建も６世紀末～７世紀初頭としてよいであろう。軒丸瓦の大半を占めるのは複弁蓮華文ＸⅡ、ＸⅣ、ＸⅥ型式であり、このことから奈良時代初頭に大規模な葺き替えがおこなわれたことがわかる。これに対して軒平瓦はごく僅かであり、講堂では創建以来一貫して軒平瓦を葺かなかったものと推定できる。さらに平安時代中期までは小規模な屋根の修理を行ないながら、講堂は存続していたことが瓦のありかたから知られた。　（次山　淳）



飛鳥寺講堂と調査位置図　1：400